

宇佐美まゆみ「デイスコース・ポライト
ネス理論と日本語教育－視点としての
日本語教育学へ－」『＜日本語・日本文
学・日本文化学＞国際学術研究会－超域
的かつ包括的な日本語教育』を目指して
－発表論文集』、中国文化大学、台北、
台湾、pp.1-20、2011年5月

デイスコース・ポライトネス理論と日本語教育
－視点としての日本語教育学へ－

宇佐美まゆみ
東京外国語大学大学院教授

【要旨】

Brown & Levinson が定義した「ポライトネス (politeness)」という概念には、従来の敬語などという「丁寧さ」に近い捉え方の「ネガティブ・ポライトネス」と、日本語で言う「丁寧さ」とは全く性質を異にする「ポジティブ・ポライトネス」という二種類の捉え方がある。ポジティブ・ポライトネスを日本語に適用して解釈すると、例えば、「冗談を言うことによって円滑なコミュニケーションが促進されるのであれば、敬語を使っていないくても『ポライト』だと捉える」というように、これまでもは違う新しい言語行動の捉え方が可能になる。これからの言語教育は、人間関係を円滑に進めるための「コミュニケーション教育」として捉える必要があるが、そういう文脈の中で、「ポライトネス理論」は、日本語教育をはじめとする言語教育にも大変興味深い視点を提供してくれる。

しかし、この包括的な理論も、基本的に、言語行動を発話行為レベルで捉えているために、細かい部分を検討していくと、敬語を有する言語とそうでない言語におけるポライトネスを同じ枠組みで捉えることができない真の意味での普遍理論になっているとは言い難い。対人コミュニケーションの普遍理論としてのポライトネス理論の構築という目的のためには、ポライトネスも談話レベルで捉える必要がある。ここでは、そのような考えに基づいて、さらに一歩踏み込んで、談話レ

ベルでポライトネスを捉え、Brown & Levinson のポライトネス理論では扱っておらず、また、Leech などとも語用論の対象として考えていなかった「相対的ポライトネス」という捉え方を核として筆者が発展させてきた「デイスコース・ポライトネス理論」の枠組みと基本概念を紹介する。その上で、この理論と日本語教育、語用論、異文化間コミュニケーションとの関係を、「視点としての日本語教育学」(宇佐美、1999, 2009) という観点から論じる。これらを通して、本シンポジウムが企図する「超域的かつ包括的な日本語教育を目指して」というテーマについても考察する。

【引用文献】

宇佐美まゆみ(1999) 「視点としての日本語教育学」『月刊言語』28(4)、大修館書店: 72-80。
.....(2009) 「視点としての日本語教育学－日本語教育学の新しいパラダイム－」『2009 年度「台湾日本語教育研究」国際シンポジウム－日本語教育のジャンルのひろがりを求めて』4-22。

デイスコース・ポライトネス理論と日本語教育 －視点としての日本語教育学へ－

宇佐美まゆみ
東京外国語大学大学院
総合国際学研究院
E-mail: usamima@tufs.ac.jp

1 はじめに

本稿では、「超域的かつ包括的な日本語教育を目指して」というテーマに即し、これからの日本語教育に関して、以下の三点を主張する。

- (1) 研究領域の多様化、細分化にもなつて、学際的研究の必要性が認識されるようになった今日、「学」というものを固定的な領域を囲む枠としてではなく、動的な視点を結ぶ流動的な線と考える「視点としての日本語教育学」という捉え方が必要である。
- (2) 日本語、日本文学、日本文化学のみならず、コミュニケーション論、心理学などの関連領域で生まれた理論も、日本語教育という「視点」から研究する人たちが出てきたとき、その理論は、その理論が生まれた領域と日本語教育学の境界線を越えて、「視点としての日本語教育学」の一部となる。
- (3) 「日本語教育」という視点を持った、しかし、研究分野や研究方法論が多岐にわたる分野を超えた「研究群」を有機的に連関させ体系的にまとめること、及び、それらの「研究群」の中にある「個々の研究」を充実させていくことが重要である。
上記三点を踏まえた上で、ここでは既に「視点としての日本語教育学」の一部になっていると言っても過言ではない「ポライトネス理論」、及び、それを修正・発展させた「デイスコース・ポライトネス理論」を取り上げ、以下の順に論じる。
- (4) これまでの「ポライトネス研究の流れ」を簡単に概観する。
- (5) その中でも、対人コミュニケーション理論の原型として捉えられるブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論 (Brown & Levinson, 1987: 以降、B&L) を簡単に概観する。
- (6) その上で、言語行動を主な対象としながらも、対人コミュニケーション理論として構想・展開されている「デイスコース・ポライトネス理論」(宇佐美、2001b, 2002, 2003, 2008b) の基本的概念を簡単に紹介する。
- (7) これらを論じた上で、最後に、デイスコース・ポライトネス理論と日本語教育の関係、及び、それがどのような意味で「視点としての日本語教育学」たりうるのかを論じる。

2 「ポライトネス研究」の流れ

そもそも「ポライトネス」という「カタカナ語」が専門用語として採用され定着したのは、B&L の理論が出て以来、そこで定義された「politeness」が一般用語としての「丁寧さ」が意味する概念よりも広く、内容も異なることから、一般用語との区別を明確にするためである(宇佐美、1998)。日本語に特化した「敬語」や「待遇表現」よりも、すべての言語を想定しているという意

味で、広い概念である。つまり、欧米における研究も含め、日本語研究、アジア言語研究等、すべてを視野に入れており、より多角的で、様々な観点からのアプローチが、「ポライトネス研究」に含まれることとなる。ここでは、その中の主なものを簡単に紹介する。

2.1 「ポライトネス」の捉え方は、いかに変容してきたか

以下に、これまでの「ポライトネス」に対するアプローチの特徴を、歴史的流れに沿って、簡単にまとめておく。

(1) 人間関係の反映・指標の観点 (対人コミュニケーションの観点)

Brown & Gilman (1960)が、伝統的な言語学的観点からではなく、心理学の観点から印欧語における二人称代名詞の相手に応じた使い分け (tu と vous の使い分け等) を取り上げ、その主要な判断要因を、「力関係(power)」と「連帯感(solidarity)」であるとした。彼らが、人称代名詞の選択に焦点を当てて、その背後にある人間関係とポライトネスの関係を分析したのを発端に、「ポライトネス」を言語形式の丁寧度という観点からだけでなく、言語使用を通じた人間関係の構築と維持に焦点を当ててより広く捉えようとする研究が展開していったとも言える。B&L(1987)の「ポライトネス理論」、宇佐美(2001b, 2002)の「デイスコース・ポライトネス理論」は、この系統にある。

(2) 言語形式重視の捉え方 (規範的捉え方)

主に、言語形式の規範的使用に重きを置いて言語学者による初期の研究で、例えば、Would you X? Could you X? Can you X? の丁寧度を質問紙調査で尋ね、その結果から、幾つかの言語形式の丁寧度を同定し、順序づけようとするようなアプローチである。日本における質問紙調査によって言語形式や言語表現の丁寧度を順序づけた敬語研究なども、これに当たると言える。

(3) 語用論的捉え方 (pragmatic view)

主に、Lakoff (1975)、Leech (1983)等のアプローチで、単なる言語形式の丁寧度ではなく、その語用論的側面に焦点を当ててポライトネスを捉え、それをいくつかの「会話の原則」にまとめたものである。しかし、語用論的捉え方という新しい観点は導入したものの、それを会話の「原則」のようなものにまとめようとしたという点で、結局は、(2)の「規範的捉え方」から抜けきれていないというのが筆者の捉え方である。

(4) フェイス保持のためのストラテジーとしての捉え方 (Face-saving view)

B&L (1978, 1987)の捉え方 (後に詳述) である。ポライトネスの語用論的側面をダイナミックに捉えているが、日常会話におけるポライトネスなどのように、一見フェイスを脅かすとは思われないような言語行動におけるポライトネスをうまく説明できないなどの問題点が指摘された。

(5) 日常生活における分別ある言語行動、会話の契約としての捉え方 (conversational-contract view)

Fraser (1990)で、日常のポライトネスを、ある種の「会話の契約」に違反しない行為であるとする捉え方である。権利と義務の相互作用についての理解という概念を提出しているが、それ以上の具体的な記述がなかった。しかし、その後、Watts (1989)の political behavior、宇佐美の「無標ポライトネス」(2001b)などの概念につながるきっかけとなった。

(6) 談話レベルにおける対人配慮行動

宇佐美 (2001b, 2002, 2003, 2008b) の捉え方で、ポライトネスを、言語形式の問題としてだけでなく、対人コミュニケーション論の観点から捉える。(1) の人間関係の反映・指標の観点、(3) の語用論的アプローチ、(4) のフェイス保持のためのストラテジーとしての捉え方、そして、(5) の日常生活における分別ある言語行動を、「無標ポライトネス」として定義づけた。(2) の言語形式重視の捉え方以外の5つの観点を総合的に取り入れている。さらには、ポライトネスを「談話レベル」で捉えることを理論の中に組み込むとともに、「相対的ポライトネス」という捉え方を前面に出し、初めてポライトネスを、「話し手」の観点 (ポライトネス・ストラテジー) からだけでなく、「聞き手」の観点 (ポライトネス効果) も含む相互作用の結果として、相対的に捉えることを提唱した。

3 言語研究から対人コミュニケーション研究へ

ポライトネスを、言語形式だけの問題としてではなく、対人コミュニケーションの問題として捉え、その振る舞いのメカニズムを体系化・理論化していくには、以下のような考え方、概念、定義の仕方などに注意する必要がある。

3.1 ポライトネスにおける普遍性と相対性

B&Lのポライトネス理論は、1987年に普遍理論として提出された当時は、主に、日本語をはじめとするアジア言語の研究者を中心に、ポライトネスは文化によって異なるもので、普遍理論にはならないとの批判が多く出た。それらの論の誤解は、ポライトネスを捉える次元の違いを考慮していない点である。例えば、非言語行動を例にとると、握手、お辞儀、胸の前で手を合わせなど、挨拶の仕方は、文化によって異なる。それは、挨拶の仕方の相対性の部分である。しかし、それらを「人と出会ったら挨拶をする」とまとめられないかと考えるのが普遍性の探究である。その他にも以下のような点が注意すべき点である。

3.2 ポライトネス理論を考える際に注意を要する考え方や用語

ここでは、ポライトネス理論を考える際に注意を要する考え方や用語を以下に箇条書きするにとどめる。

- ・ポライトネスの普遍理論探究のためには、「ポライトネス」を操作的に定義することが必要
- ・「ポライトネス」という言葉の「語源」や「意味論的意味」、「常識的意味」を問題とするのではなく、定義した内容に相当するものが、「ポライトネス」であると考える必要はない。
- ・「ポライトネス」は、実際には、円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動 (ストラテジー) としての「対人配慮行動」という言い方が近い。
- ・ポライトネス・ストラテジーは、人間の「基本的欲求」としての「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」に配慮する言語行動全体である。
- ・一般に簡略化して、ポジティブ・ポライトネス/ネガティブ・ポライトネスと呼ばれているものは、厳密には、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー / ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーと捉える必要がある。
- ・研究者によって異なる捉え方があることなどに言及できる総称としての「ポライトネス」とB&Lの理論の枠組みにおける「ポライトネス・ストラテジー」の違いを認識する必要がある。
- ・「ストラテジー」という用語も注意が必要で、B&Lの理論の中では、一般に、「戦略的」「方略的」

と訳されるのとは異なり、「あいづち行動」のような、話者が必ずしも自覚していない周辺言語行動も含む言語行動をすべて「ストラテジー」と呼ぶ。

4 ブラウンとレビンソンのポライトネス理論

以下では簡単に、B&Lのポライトネス理論の骨格をまとめる。というのは、次に論ずる宇佐美の「デイスコース・ポライトネス理論」は、B&Lの基本的概念は踏襲しながら、それを談話レベルの観点も組み入れて体系化し、さらには、新たな概念を追加・発展させたものであるからである。

4.1 B&Lのポライトネス理論の4つの観点

B&Lのポライトネス理論は、以下の4つの観点を骨格に、総合的に組み立てられているものである。

(1) 「フェイス」という鍵概念

人間には、2種類の基本的欲求がある。

「ポジティブ・フェイス(positive face)」または、「親近欲求」

他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいという欲求。

(プラス方向への欲求)

「ネガティブ・フェイス(negative face)」または、「不可侵欲求」

他者に邪魔されたり、立ち入られたくないという欲求。

(マイナス方向に関わる欲求)

ポライトネスは、対話者のこの2種類のフェイスを保つためのストラテジーとして規定されたとした。

(2) フェイス侵害度見積もりの公式

B&Lは、ポライトネスは、ある発話行為が、「相手のフェイスを脅かす」度合い(フェイス侵害度)に応じて規定されるとする。具体的に数量化できるわけではないが、この相手のフェイス侵害度は、三つの要素によって規定されるとして、以下のように公式化している。

$$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$$

Wx: 行為xの「フェイス侵害度(FT度)」

D: 話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)の「社会的距離(Social Distance)」

P: 聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

Rx: 特定の文化で、ある行為xが「相手にかかる負荷度(Rank of imposition)」

つまり、ある行為xが相手のフェイスを脅かす度合い(Wx)は、xという行為(例えば、旅行先で特定のものを購入してもらうよう依頼する)が、ある特定の文化の中でのくらしい相手に負担をかけると思われているかという「相手にかかる負荷度(R)」と、話し手と聞き手の「社会的距離(D)」(対称的關係)、聞き手の話し手に対する「相対的力(P)」(非対称的關係)の三要素が関数的に働いて決まってくるとしている。また、xという行為が相手にかかる負荷度(R)は、文化によって異なるとしている。この最後の、「同じ行為であっても、ある行為Xが、相手にかかる「負荷度」は、文化によって異なる」ということが、この公式に組み込まれている

ことを、改めて強調しておきたい。というのは、この理論への批判の中には、文化差を考慮していないという批判も多いからである。

彼らの言うように広い意味でポライトネスを捉えるなら、これまでの日本における「いく」「いらっしゃる」「おいでになる」などの言語形式の丁寧度やその相手に応じた使い分けに焦点をあつて膨大な敬語研究は、「既に文法化・語彙化されているネガティブ・ポライトネス」の研究であつたと言つてもいいだろう。また、従来の英語における「丁寧さ」に関する研究でもよく取り上げられてきた「慣用的間接表現」「垣根表現(hedge)」「名詞化」なども、Brown & Levinsonの枠組みでは、ネガティブ・ポライトネスのストラテジーとなる。

(3) ストラテジーの選択を決定する状況

Brown & Levinsonの枠組みでは、「ポライトネス」は、以上に述べた三要素によって規定される「相手のフェイスを脅かす度合い(Wx)」に応じて使い分けられる「話者の自発的なストラテジー」として捉えられている。そして、以下の5つが主要ストラテジーとしてあげられている。いわゆる「ポライトな」言語行動の分析は、主に、以下の②、③、④が中心となっている。

- ① FTAの軽減行為を行わず、直接的な言語行動をとる。(without redressive action, baldly)
- ② ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー (positive politeness strategy)
- ③ ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー (negative politeness strategy)
- ④ 伝達意図を明示的に表さない(ほのめかす)。(off record)
- ⑤ FTAを行わない。(doing no FTA)

Brown & Levinsonは、さらに、上記5つのストラテジーのどれを選択するかは、相手のフェイスを脅かす度合いに応じて決定される傾向にあるとして、「ストラテジーの選択を決定する状況」を、以下の図1のように表している。

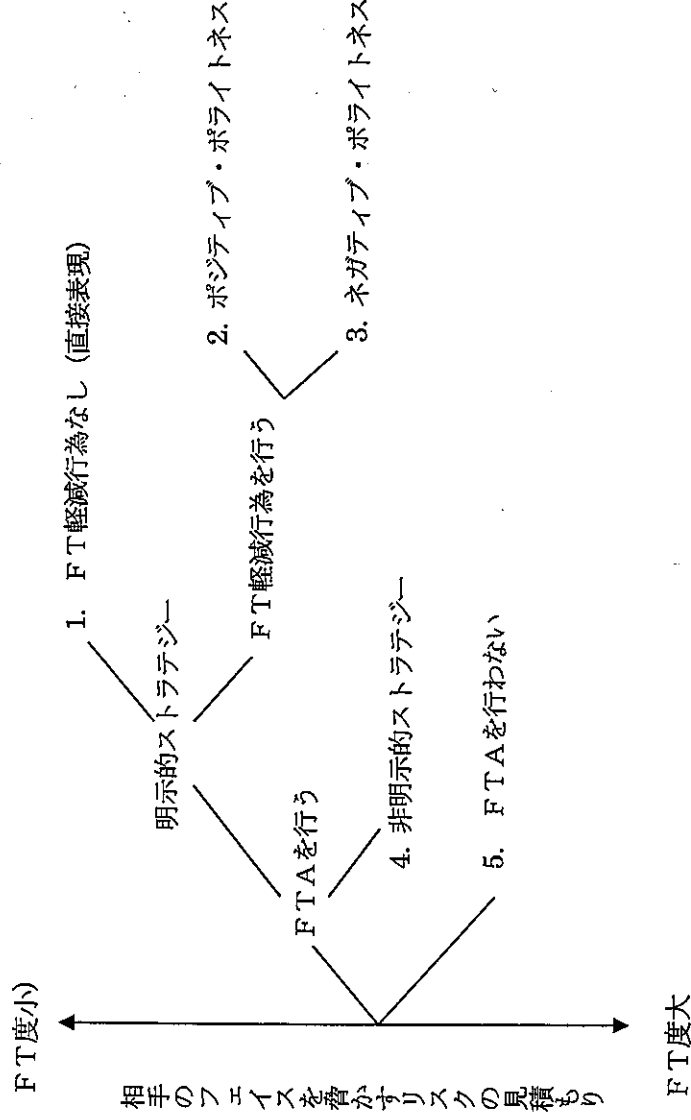


図1 ストラテジーの選択を決定する状況

(from Brown & Levinson 1987: 60; 一部簡略化。訳は筆者)

相手のフェイスを脅かす度合いがあまりにも高い場合には、そのFTAを行わないという選択がな

される可能性が高い。つまり、FTAを行わないのが最善の策ということである。しかし、FTAを行わざるを得ない場合は、伝達意図を明示するかしないかに分かれる。FTが大きいと思われる場合は、「ほのめかす」などの非明示的ストラテジー (off record) が取られることが多い。言語で明示的に表現する場合 (on record) は、さらに、「直接的に言う (bald on record)」場合と、何らかのFT軽減行為 (redressive action) を行う場合とに分かれる。FT軽減行為を行う場合には、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとネガティブ・ポライトネス・ストラテジーがあるというわけである。彼らのこの図は、FTが比較的高い場合は非明示的ストラテジーが取られやすく、FTが小さくなるにつれ、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、この順に選択されやすくなるということを示している。つまり、ポジティブ・ポライトネスは、相手のフェイスを脅かす度合いが低い場合に用いられやすく、FTが最も低い行為の場合は、直接表現が選択されやすいということである。

(4) 具体的ストラテジーの提示

彼らは、さらに、ポジティブ・ポライトネスの主要ストラテジーを15、ネガティブ・ポライトネスの主要ストラテジーを10、オフ・レコードの主要ストラテジーを15挙げ、それぞれについて、具体的に説明している。これらの主要なストラテジーは、さらにいくつかの、より具体的なストラテジーに分類されているが、ここでは、各主要ストラテジーの主な例をあげるにとどめる。

S:話し手 H:聞き手

<ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー (15)>

- (1) H (関心・欲求・要求・所有物) に注目・注意する
- (2) (Hへの関心、是認、共感) を誇張する
- (3) Hへの関心を強化する
- (4) 内輪であることを示す標識を用いる
- (5) 一致を求める
- (6) 不一致を避ける
- (7) 共通の基盤を仮定する/持ち出す/主張する
- (8) 冗談を言う

(9) Hの欲求についてのSの知識と関心を主張または前提とする

- (10) 申し出る、約束する
- (11) 楽観的になる
- (12) SとHとともに活動の中に含める
- (13) 理由を与える(求める)
- (14) 互恵性を仮定/主張する
- (15) Hに贈り物をする (物、同情、理解、協力等)

<ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー (10)>

- (1) 慣習的に間接的になる
- (2) 質問する、曖昧化(hedge)する
- (3) 悲観的になる
- (4) 相手への負荷(Rx)を最小限にする
- (5) 敬意を払う

- (6) 謝罪する
 - (7) 話し手Sと聞き手Hを非人称化・非人格化・非個人化する
 - (8) FTAを一般的規則として述べる
 - (9) 名詞化する
 - (10) 自分が借りを負うこと、相手に借りを負わせないことを明言する
- <オフ・レコード・ストラテジー (15)>

- (1) ヒントを与える
- (2) 関連のある手がかりを与える
- (3) 含意する
- (4) 控えめに言う
- (5) おおげさに言う
- (6) トートロジーを使う
- (7) 矛盾した言動を行う
- (8) 皮肉を言う
- (9) メタファーを使う
- (10) 修辭疑問を使う
- (11) 多義的な言い方をする
- (12) あいまいな言い方をする
- (13) 過剰に一般化する
- (14) 聞き手を置き換える (ブーメラン・スピーチ)
- (15) 不完全な言い方をする、省略する

4.2 B&Lのポライトネス理論の特徴と問題点

以下の表1に、B&Lのポライトネス理論の特徴と問題点をまとめる。

表1 B&Lのポライトネス理論の特徴

- ・B&Lのポライトネス理論は、「言語行動のポライトネス・ストラテジーに関する理論」と捉えることができる。
- ・対象：基本的に、発話行為レベル
- ・ポライトネスの捉え方：主に、聞き手のフェイスの保持のために、「話者が用いる言語ストラテジー」として捉えている。
- ・「フェイス侵害度の見積もりの公式」($Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$)に基づいてストラテジーが選択されるとした。
- ・「絶対的ポライトネス」(有標ポライトネス、FT軽減行為として捉えられるもの)
- ・フェイス侵害行為 (FTA) がないように見える言語行動のポライトネスの説明や、ポジティブ・ポライトネス (ほめ行動等) の動機の説明などがしにくい、或いは、十分に体系化されていない。

以下には、B&Lのポライトネス理論の問題点を列挙する。

- (1) 一発話行為レベル、多くて幾つかの発話行為の連鎖 (sequences) レベルの分析に留まっております、より長い談話におけるポライトネスをうまく説明できない。
- (2) 基本的に、ポライトネスを文レベル、発話行為レベルで捉えているために、日本語などのように語用論的に制約力をもつ複雑な敬語体系を有する言語における「文レベル、発話行為レベルのポライトネス」がうまく説明できないものになっている。つまり、逆にそのことが、特に、敬語を有する言語においては、方略的言語使用は、文レベルや発話行為レベルには現われにくいという事実をより明確にしており、それ故に、文レベル、発話行為レベルにおける研究は不適切であり、談話レベルの研究の必要があることを示唆している。
- (3) 敬語体系を持つ言語における「方略的言語使用」の説明や例がほとんどない。
- (4) 敬語体系を持たない言語における「社会的規範に従った言語使用」の説明や例もほとんどない。
- (5) 一見 FTA がないように見える行動のポライトネスをうまく説明できない。
- (6) ポジティブ・ポライトネス (ほめ行動等) の動機の説明などがしにくい、或いは、十分に体系化されていない。
- (7) 円滑なコミュニケーションを妨げる行動について、ほとんど扱っていない。

5 「ディスコース・ポライトネス理論」ーポライトネス理論から対人コミュニケーション論へ
ここでは、まず「ディスコース・ポライトネス理論」の特徴を先の B&L のポライトネス理論のまとめと対照させる形で、以下の表2にまとめる。

表2 ディスコース・ポライトネス理論の特徴

ディスコース・ポライトネス理論は、談話レベルにおいて話し手と聞き手双方の観点を取り入れた対人コミュニケーション理論であり、話し手の側からの「ポライトネス・ストラテジー」と、聞き手の観点から捉えた「ポライトネス効果」の双方を考慮した理論である。

対象：談話レベル

ポライトネスの捉え方：「ポライトネス・ストラテジー」と「ポライトネス効果」を分けて考える。

「ポライトネス・ストラテジー」は、話し手の側の、当該の行為の「フェイス侵害度の見直し」に基づいて選択されるものとして捉えるが (B & L のポライトネス理論が対象とした部分)、そのストラテジーが実行された後の、「ポライトネス効果」は、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見直しの差」によって生まれると考える。つまり、「ポライトネス効果」は、聞き手の側の視点に置き置いて説明する。

ディスコース・ポライトネス理論は、以下の二点に基づいて構想されたものである。

- ① 今後は、言語の静的分析から動的分析へと転換していく必要がある。
- ② 今後、ポライトネス研究は、絶対的ポライトネス研究から、相対的ポライトネス研究へと進む必要がある。

5.1 「ディスコース・ポライトネス理論」の鍵概念

ブラウンとレビンソンの「ポライトネス理論」は、言語形式の丁寧度や敬語だけではなく、「語用論的ポライトネス」を包括的に捉えようとしたものとして一定の評価ができる。しかし、様々な問題を残していることもまた事実である。本稿では、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の問題点を克服するべく新たに提案された「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美 2001b, 2002, 2003, 2008b) の骨格を紹介した上で、ディスコース・ポライトネス理論と日本語教育の関係、及び、視点としての日本語教育学とは何かを考える。

ディスコース・ポライトネス理論には、以下の7つの鍵概念がある。(1) 「ディスコース・ポライトネス」、(2) 「基本状態」、(3) 「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」、(4) 「有標行動」と「無標行動」、(5) ポライトネス効果、(6) 見直し差 (De 値) と、行動の適切性、ポライトネス効果の関係、(7) 「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」である。以下、それぞれについて簡単に解説する。

(1) 「ディスコース・ポライトネス (discourse politeness)」

「ディスコース・ポライトネス」とは、一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である」(宇佐美 1997, 2001b, 2002, 2003b, Usami 2002) と定義される。また、特定の「活動の型」の「典型的な状態にある談話の総体」も指す。

(2) 「基本状態 (discourse default)」

「基本状態」には、以下の2種類がある。1つは、「特定の『活動の型』における談話の『典型的な状態』」を指し、「談話の基本状態」と呼ぶ。また、もう1つは、「その談話の基本状態を構成する要素としての『特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態』」を指し、「談話要素の基本状態」と呼ぶ。前者は、理論的観点から想定するもので、談話内の諸要素を特定するものではない。後者の「談話要素の基本状態」とは、個々の研究において研究対象として設定した要素について、同定・算出するものである。例えば、数多くの同じ活動の型の「典型的な状態の談話」における「主要な言語行動の平均的な構成比率 (分布)」、「各々の要素の平均的な生起率」、「典型的な談話展開パターン」などがある。

より具体的に言うと、「ある活動の型の談話における重要要素の構成比率の基本状態」とは、例えば、成人の初対面二者間会話では、スピーチレベルの構成比率が、敬体6：常体1：スピーチレベルのマーカーなし3、であるのが基本状態であるというように捉え方を言い、「談話内の『特定の要素』の基本状態」とは、スピーチレベルという要素を例にとると、成人の初対面二者間会話においては「敬体使用率が約6割」であるのが基本状態であるというように捉え方であり、「談話の展開パターンの基本状態」とは、依頼会話において、注意喚起→見込みの確認→補助ストラテジー→依頼発話という展開になるのが基本状態であるというように捉え方をする(宇佐美 2001b)。

これらの「基本状態」を一般化するには、厳密には、数多くのデータを分析・検証し、同定していく必要があるが、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みで行う個々の実証研究においては、「基本状態」自体を一般化することが目的ではないので、当該データで同定した「基本状態」は作業仮説として扱う。そして、当該の言語行動の「基本状態からの離脱度」を「有標性」と呼び、その「ポライトネス効果」は、有標性の度合いについての話し手と聞き手の見

積もり差によって、相対的に引き起こされるものであると捉える（詳細は、「⑤ポライトネス効果」を参照）。「基本状態」は、このような「相対的效果」を予測したり解釈するための前提として、同定しておく必要があるものとして捉えるのである。

デイスコース・ポライトネス理論の最も重要な点の一つは、上述の2種類の「基本状態」を「媒介変数 (parameter)」として扱うことによって、「ポライトネス効果を相対的に捉える」ということを、より具体化して理論に組み込んだ点である。

(3) 「有標ポライトネス (marked politeness)」と「無標ポライトネス (unmarked politeness)」
B&L (1987) のポライトネス理論におけるポライトネスは、基本的には、依頼行為などのように、相手のフェイイスを脅かす「フェイイス侵害行為」を行わざるを得ないときに、「相手のフェイイス侵害度を少しでも軽減するためにとるストラテジー」として捉えられている。このような「フェイイス侵害度の軽減行為」としてのポライトネスを、デイスコース・ポライトネス理論では、「有標ポライトネス」と呼ぶ。

しかし、このように、「相手のフェイイス侵害度を軽減するためにとるストラテジー」としてのみポライトネスを捉えると、フェイイス侵害行為 (Face Threatening Act: FTA) が生じていない状態にある「日常会話 (ordinary conversation)」などにおける「ポライトネス」をうまく説明できないことになる。そのため、我々の日常生活には、「フェイイス侵害度軽減行為」とは異なるタイプのポライトネスもあると捉えることが必要になる。それは、「特定の状況や場面において期待されている言語行動」と関係する。特定の状況で、「あつて当たり前」で、それが現れないときに初めてそれがいないことが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。このようなタイプのポライトネスをデイスコース・ポライトネス理論では、「無標ポライトネス」と呼ぶ。先に説明した談話の「基本状態」は、「ポライトネス」の観点からは、「無標ポライトネス (相手のフェイイスを侵害しない状態)」であると捉えることができる。

ポライトネスの普遍理論を確立するためには、「ポライトネス」をこのような、フェイイスの侵害が生じていない状態にある日常会話における「基本状態」としてのポライトネス (無標ポライトネス) も併せて、より体系的に捉える必要がある。そのためには、ポライトネスを、「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」とに分けて考え、それぞれを体系的に組み込んだ包括的な理論を構築する必要がある。

(4) 有標行動 (marked behavior) と無標行動 (unmarked behavior)

談話の「基本状態」は、ポライトネスの観点からは、「無標ポライトネス」である。そして、談話の「基本状態」を構成する要素としての言語行動を「無標行動」、各々の要素の基本状態から離脱する言語行動、或いは、基本状態とは異なる談話レベルから見ただけの行動を、「有標行動」と呼ぶ。

デイスコース・ポライトネス理論では、特定の談話の「基本状態」は、ポライトネス効果を相対的に捉えるために同定する必要があるものであると捉える。つまり、各々の談話と、それを構成する諸要素の「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の「動き」や「有標性 (基本状態からの離脱度)」に着目して、「相対的ポライトネス」の体系化を試みるのである。

(5) ポライトネス効果 (politeness effect)

談話の基本状態を構成する諸要素は、無標行動、つまり、あつて当たり前のもので、デイスコース・ポライトネスを形作っている。この「基本状態」は、各々の要素の状態としても、複

数の要素の分布の状態 (異なるスピーチレベルの構成比率等) としても、そして諸要素から構成される談話の総体 (デイスコース・ポライトネス) としても、ポライトネスの観点からは、「最適の状態」、或いは、「最も自然な状態」としての「無標ポライトネス」であると捉えられる。それ故に、もし、談話の基本状態を構成する要素の何かが欠けた場合や、或いは、何かが多すぎる場合、それが意識され、ポライトでないとして認知されたり、その他の何か特別の効果が生まれると想定するのである。

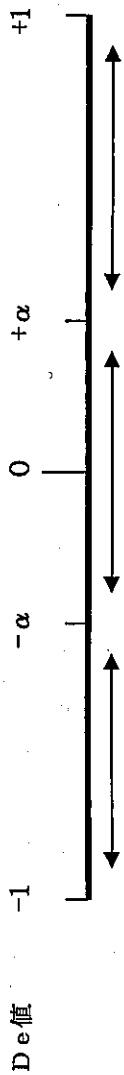
デイスコース・ポライトネス理論では、「ポライトネス効果」とは、「談話の基本状態や話し手の言語行動、選択されたストラテジーに対する話し手と聞き手の「見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値)」によって引き起こされる聞き手側からの認知」を表す。話し手と聞き手の「見積もり差」をより具体的に記すと、次の3つにまとめられる。①「ある有標行動のフェイイス侵害度」についての話し手と聞き手の見積もり差、②「談話の基本状態」が何であるかについて話し手と聞き手の見積もり差、③「フェイイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての話し手と聞き手の見積もり差。

いずれにしても、ポライトネス効果には、以下の3種類がある。すなわち、①プラス効果、②ニュートラル効果、③マイナス効果である。これらは、言い換えると、①心地よい、丁寧だと感じるという効果、②ニュートラルな効果 (強調や話題転換などのように、特に丁寧と感じるわけでも不愉快でもない効果である「言語的談話効果」等)、③不愉快な、失礼だと感じる効果である。

(6) 「見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値)」と「行動の適切性 (appropriateness of behavior)」
「ポライトネス効果 (politeness effect)」の関係

上述した3種類の話し手と聞き手による「見積もり差 (De 値)」は、もちろん、絶対的な数値として算出できるわけではないが、以下の図1に示すように、0を挟む-1から+1までの一つの連続線上に分布すると仮定することによって、体系的に捉えることができる。「見積もり差 (De 値)」と「行動の適切性」、「ポライトネス効果」の関係は、以下の図2のようになる。

つまり、話し手と聞き手の「見積もり差」が、0か、「許容できるずれ幅 ($\pm \alpha$)」の範囲内に収まる行動は、「行動の適切性」の観点からは、「適切行動」とみなされ不快感をもたさない。つまり、ポライトネス効果の観点からは、プラス効果を生むか、ニュートラル効果になる。また、話し手の見積もりが聞き手の見積もりよりも、「許容できるずれ幅 (α)」を超えて少ない場合、それは、行動の適切性の観点からは、「過少行動」となり、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果 (失礼、不快) を生む。逆に、話し手の見積もりが、聞き手の見積もりよりも、許容できるずれ幅 (α) を超えて多い場合、それは、行動の適切性の観点からは、「過剰行動」となり、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果 (慇懃無礼、失礼、不快) を生むことになる。



見積もり差 (De 値) の範囲	$-1 \leq De < 0 - \alpha$	$0 - \alpha \leq De \leq 0 + \alpha$	$0 + \alpha < De \leq +1$
行動の適切性	過少行動 (例: 粗野)	適切行動 (適切)	過剰行動 (例: 慇懃無礼)
ポライトネス効果	マイナス効果 (失礼, 不快)	プラス効果 (快) ニュートラル効果 (中立)	マイナス効果 (失礼, 不快)

見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値) : $De = Se - He$

Se : 話し手 (Speaker) の「見積もり (estimation)」(以下の*参照). 仮に, 0 から 1 の間の数値で表すものとする.

He : 聞き手 (Hearer) の「見積もり (estimation)」. 仮に, 0 から 1 の間の数値で表すものとする.

α : 許容できるずれ幅

* 「見積もり (estimation)」には, 以下の 3 種がある.

- ① 「ある有標行動のフェイイス侵害度」の見積もり
- ② 「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり
- ③ 「フェイイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての見積もり

図 2 「見積もり差 (De 値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」

これまで、敬語研究などでは、あまり扱われてこなかった「慇懃無礼」は、デイスコース・ポライトネス理論で解釈すると、「話し手が、聞き手が当該の状況で適切であると考える言語行動よりも、『許容できるずれ幅 α 』を超えて、『丁寧な表現』を使用した」場合であると解釈できる。つまり、「話し手が、聞き手が期待する、当該の状況における図 2 に記した 3 種の『見積もりに応じた言語表現』よりも、『許容できるずれ幅 α 』を超えて、『丁寧すぎる表現』を用いた場合、過剰行動)』であるということになる。

このように、実際の「ポライトネス効果」は、「談話の基本状態が何であるかという見積もり」、「特定の言語行動に対するフェイイス侵害度の見積もり」、及び、「フェイイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジーの見積もり」の、話し手と聞き手の「差 (ずれ)」から生まれる。このような「相対的観点」を、より具体化して理論の体系に組み込んだという点も、デイスコース・ポライトネス理論において初めて取り入れられた新しいポライトネスの捉え方である。このような観点は、「異文化接触場面」でしばしば生じる誤解に基づく問題を記述する際の一つの枠組とも成り得る。

(7) 「相対的ポライトネス (relative politeness)」と「絶対的ポライトネス (absolute politeness)」

最後に、「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」についてまとめる。言語形式について言うなら、「行く」より「いらっしやる」のほうが丁寧度が高いとか、その他の条件が一定ならば、直接的表現より間接的表現のほうが、より丁寧であるというような捉え方は、「絶対的ポライトネス」を扱っていると言える。しかし、現実には、いつも常体で話す相手 (スピーチレベルの「基本状態」が常体) に「敬語」を使うと、かえって皮肉やいやみになるというように、

たとえ、敬語を使っている、「マイナス効果」を生むこともある。つまり、常体が無標スピーチレベルである談話において「有標行動」となる敬体を使用することは、言語形式自体は、「敬体」であるにもかかわらず、相手に失礼だと感じさせたり、不愉快にさせたりするというような「マイナス効果」を生み得る。一方、仲間意識を高めるために用いる「ため口 (友達同士の言葉遣い)」は、言語表現の丁寧度は低くても、プラス効果として機能することもある。

つまり、実質的に「ポライトネスの効果」を生み出すのは、「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく、ある特定の「談話」の「基本状態」からの離脱や回帰という言語行動の「動き」である。そして、その「ポライトネス効果」は、特定の場面においてどのような言語行動が適当であると考えているかという「基本状態の認識」、「当該の言語行動や談話行動のフェイイス侵害度」、及び、「フェイイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」の 3 つのうちのどれか、或いは、すべてにおける話し手と聞き手の「見積もり差 (ずれ)」から生まれると考える。これが、「相対的ポライトネス」という捉え方である。上述したように、デイスコース・ポライトネス理論は、対人コミュニケーションにおけるポライトネスをより広い観点から捉えて体系化しようとするものであり、円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動としてのポライトネスだけではなく、「失礼」「無礼」「慇懃無礼」といった行動も、マイナス・ポライトネスとして、同一の枠組みで捉えられるものである。

5.2 「デイスコース・ポライトネス理論」の新視点

デイスコース・ポライトネス理論には、以下の 6 つの新しい視点がある。

(1) ポライトネスを、「言語行動におけるいくつかの要素がもたらす機能のダイナミクスの総体」として談話レベルから捉える。そして、そのように総体として捉えたポライトネスを「デイスコース・ポライトネス」と呼んで、「文/発話レベル」のみから見たポライトネスと区別する。

(2) 「基本状態」という概念を導入し、(1) で説明した総体としての「デイスコース・ポライトネス」を、当該談話の「基本状態」という「媒介変数 (parameter)」として捉える。それとともに、同じ活動の型における数多くの「失礼のない状態の談話」において、デイスコース・ポライトネスを構成する各々の要素の「当該談話における平均的な構成比率」や、「各々の要素の平均的な生起率」、「典型的な談話展開パターン」などを、それぞれ「言語行動や談話展開パターンの基本状態」として捉える。

(3) デイスコース・ポライトネス理論では、話し手が見積もる「ポライトネス・ストラテジー」と、話し手が実際に行った言語行動のフェイイス侵害度についての話し手と聞き手の「見積もり差: De 値)」によって引き起こされる「聞き手側から見た認知」としての「ポライトネス効果」を区別して考える。

(4) 「ポライトネス効果」は、次の 3 種の「話し手と聞き手の見積もり差」のいずれか、或いは、すべてによって、相対的に生まれてくると考える。①話し手が実際に行った言語行動のフェイイス侵害度についての「見積もり差」、②「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり差、③「フェイイス侵害度の見積もりに応じて選択されたストラテジー」についての見積もり差。(5) 話し手と聞き手の種々の見積もり差のずれが、「許容できるずれ幅 ($0 \pm \alpha$)」内に収まる場合の、ある特定の有標行動 (一発話レベル・談話レベル) の「ポライトネス効果」は、当該の談話やそれを構成する要素それぞれの「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の離脱の

度合い（有標性）に応じて相対的に生まれてくると捉える。

(6) ディスココース・ポライトネス理論は、この「相対的效果」という捉え方を理論の核とする。

5.3 ディスココース・ポライトネスの基本状態 (default) の同定方法

ディスココース・ポライトネス理論の枠組みで、実証的研究を行う場合は、概ね以下の表3のような手順で行うことができる。基本的には、無標ポライトネスとしてのディスココース・ポライトネスの基本状態を同定した上で、何が有標行動であるかを相対的な視点から同定し、その機能を明らかにする。

表3 ディスココース・ポライトネス理論の枠組みでの分析対象と機能同定のプロセス

分析対象の決定（「依頼」など特定の発話行為を対象とするか、スピーチレベルのシフト操作、あいづち、「なんか」などの形式を談話レベルで捉えるか等の決定）

↓

無標ポライトネスとしての「ディスココース・ポライトネス」の基本状態を同定する

（分析項目の、ある談話におけるプロトタイプ的な状態の同定）

↓

プロトタイプではない有標行動の同定（その他は、無標行動と捉える）

↓

有標行動の機能の同定

有標行動の機能・効果は、基本的に以下の3種類ある。

① プラス効果（有標ポライトネス）

ポジティブ・ポライトネスなど、特別の機能。

発話行為レベルの分析には、Brown & Levinson のポライトネス理論の公式が適用できる場合が多い。しかし、談話のポライトネスの分析には、ディスココース・ポライトネスの概念と、さらにそれを精緻化・具体化した概念を用いる必要がある。

③ ニュートラル効果（無標ポライトネス）

言語的談話効果—命題内容の強調、話題の転換などの談話標識としての機能等。有標行動ではあるが、ポライトネスの観点からは、無標ポライトネスとしてのディスココース・ポライトネスを構成する要素であるという意味で、無標ポライトネスであると捉える。

④ マイナス効果（有標ポライトネス）

無礼、慇懃無礼、皮肉など、特別の機能。マイナス効果には、以下の2種類がある。

非意図的一話し手は、聞き手のフェイイスを故意に脅かそうとしたわけではないが、聞き手は、自分のフェイイスが脅かされたと感じる場合。つまり、聞き手のフェイイス侵害度 (FT 度) の認知のほうが、話し手のフェイイス侵害度 (FT 度) の見積もりよりも大きかった場合

意図的一話し手が、自分のフェイイスを優先して、聞き手のフェイイスを脅かすことを厭わなかった場合

一話し手が、聞き手のフェイイスを脅かすことを、意図した場合

5.4 ディスココース・ポライトネス理論の今後の課題

ディスココース・ポライトネス理論には、以下のような課題がある。今後、理論的・実証的研究が進むことを期待する。以下には、課題を列挙するにとどめる。

(1) 「発話内容」と「言語形式の丁寧度」の扱い方と位置づけをより明確に体系化する。

例 興味深いお話をありがたうございました。

あなたの話、おもしろかったよ。ありがとう。

(2) 有標行動を同定した後、その有標行動が、プラス、ニュートラル、マイナスの3つのうちのどの効果を生むかを「予測・同定するプロセス」を体系化する。

(3) 有標行動の効果としての有標ポライトネス・ストラテジーの具体例を集め、それらを体系的に順序づける。これには、B&L の具体的ストラテジーや、蒲谷・川口他 (2006) の待遇表現研究も活用できる。

(4) マイナス効果を生む言語行動（マイナス・ポライトネス行動）の説明を体系化する。

(5) ある有標行動が意図的であったか、非意図的であったかの区別と、その効果の同定方法を体系化する。

(6) いくつかの発話連鎖が生むポライトネスの機能を、より大きいディスココース・ポライトネスの中で位置づけ、体系化する。

5.5 「ディスココース・ポライトネス理論」から見たコミュニケーション・スタイルの「学習」第二言語における会話においては、情報を伝達するだけではなく、コミュニケーションを円滑に行えるようになることも必要である。ここで、改めて、ディスココース・ポライトネス理論の枠組みで第二言語における「学習」を解釈する。ディスココース・ポライトネス理論の観点から考えると、第二言語における円滑なコミュニケーションの方法を身につけるということは、目標言語における様々な活動の型における「談話の基本状態」や「談話を構成する諸要素の基本状態」を適切に見積もることができるようになるということであり、また、有標行動が適切に行えるようになるということである。

換言すれば、学習者と目標言語・文化の平均的な成員との種々の談話の「基本状態」の捉え方がほぼ一致しており、且つ、ある言語行動の両者の「フェイイス侵害度の見積もり差 (De 値)」が「0 をはさんだ許容できるずれ幅 ($0 \pm \alpha$)」の範囲内に収められるということである。つまり、フェイイス侵害度の見積もり差 (De 値) が0か許容範囲内であれば、マイナス効果は生まれず、よって「コミュニケーションが円滑に行われている」ということになる。

例えば、聞き手としての母語話者が、ある場面における「フェイイス侵害度」から考えると、「そうだったんですか」と「敬体」を使うのが適切であると見積もっているときに、話し手 (学習者) が「そうなの」と常体を使い、それが聞き手の期待 (見積もり) より低すぎた場合、見積もり差 (De 値) が $0 - \alpha$ の許容範囲よりも低くなり、したがって相手に「失礼だ」(マイナス効果) と感じさせることになるかと解釈できる。

逆に言うと、学習者が、当該談話の基本状態を学習や経験を通して把握し、それに合わせた言語行動を行ったり、フェイイス侵害度や基本状態、選択すべきストラテジーの見積もり差である De 値を、「 $0 \pm \alpha$ 」の許容範囲内に収めることができなければ、その言語における適切な言語運用を学習し、実践していると考えることができる。

5.6 DP理論の応用

DP理論の応用として考えられることには、以下のようなことがある。

- (1) 異文化接触場面におけるミス・コミュニケーションの原因解明と予防策の考案
- (2) 外国語教育への応用

円滑なコミュニケーションのための外国語教育における指導のポイント

- ① 相手や場面に応じた言語形式や表現を選択する際には、FT度の見積もりの公式を活用することが重要であることを理解させる。(FTの見積もり)
- ② それは、デイスコース・ポライトネス理論で言うところ、相手や場面を考慮した「そのデイスコースの基本状態」を、うまく掴む力が必要だということになる。
- ③ つまり、丁寧すぎても、それが足りなくてもいけない。適切さが重要。
- ④ このことは、英語など日本語以外の言語にも適用できる。

6 デイスコース・ポライトネス理論と日本語教育―視点としての日本語教育学へ―

これまで、様々な背景を持つ研究者が共通の関心のもとに集まり形成している複合領域の一つとして日本語教育学を捉えてきた(宇佐美、1999a、2009)。その中で、各領域の境界線を固定的な枠としてではなく、動的な視点を結ぶ流動的な線と捉える見方を提示した。これは、同じ研究が、ある視点からは、日本語教育学にも含まれ得るし、また、別の視点から見ると、例えば、心理学にも含まれ得ると考えるということである。そのような見方をすると、日本語の教授法などを扱う狭義の日本語教育学ではないが、日本語教育の発展になんらかの形で寄与し得る関連領域の研究というものを、「視点としての日本語教育学」として捉えることができる。そのよい例が、B&Lの「ポライトネス理論」であり、それをさらに展開させた「デイスコース・ポライトネス理論」である。

B&Lのポライトネス理論は、言語学、文化人類学、心理学、社会学など多くの分野の研究者の興味を喚起した。しかし、円滑なコミュニケーションのためのストラテジーとしてポライトネスを捉え、その原則を提示したこの理論を、日本語に限らず、言語教育学の中に位置づけようとする見方は、これまでそれほど明確には主張されていない。しかし、現実には、文法的正確さだけではなく、円滑なコミュニケーションを重視した言語教育の必要性が強調される動向の中、最近では、この理論は日本語教育関係の論文で頻繁に取り上げられ、論じられるようになってきている。このように、関連領域で生まれた理論も、日本語教育という「視点」から研究する人たちが増えてきたとき、その視点は、その理論が生まれた領域(-Brownは文化人類学者、Levinsonは心理学にも詳しい言語学者-と既に複合的である)と日本語教育学の境界線を越えて、「視点としての日本語教育学」の一部となるのである。

「視点としての日本語教育学」という捉え方は、研究領域の多様化、細分化にともなって、学際的研究の必要性が認識されるようになって今日、そもそも「学」というものを固定的な領域を囲む枠としてではなく、動的な視点を結ぶ流動的な線と捉えるという見方から生まれたものである。そう考えると、「デイスコース・ポライトネス理論と日本語教育」は、前者が「日本語教育学」という一領域の「枠」の中に収まるかという問題ではなく、デイスコース・ポライトネス理論というものが、「日本語教育という視点」にいかに関与していくことができるか、また逆に、「日本語教育という視点」に触発されてさらなる発展を遂げるかという問題になる。

デイスコース・ポライトネス理論が「視点としての日本語教育学」の一つの核となりえるか否かは、「日本語教育」という視点を持った「デイスコース・ポライトネス理論」の「研究群」の中にある個々の研究の内容と質とによって、今後自ずと示されていくことになる。

[付記] ポライトネス理論、デイスコース・ポライトネス理論の概観については、内容がら、他の拙稿と重なる部分があることをお断りしておく。

【引用文献】

<日本語>

宇佐美まゆみ (1998a) 「ポライトネス理論の展開：デイスコース・ポライトネスという捉え方」、『日本研究・教育年報 1997 年度版』、東京外国語大学日本課程編、147-161。

宇佐美まゆみ (1998b) 「デイスコース・ポライトネス・ストラテジーとしてのスピーチレベル・シフト」 日本語教育学会秋春大会予稿集

宇佐美まゆみ (1999a) 「視点としての日本語教育学」『言語』4月号、大修館書店

宇佐美まゆみ (1999b) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』第44巻第6号 (1999年5月号)、83-89。学燈社。

宇佐美まゆみ (1999c) 「談話の定量的分析―言語社会心理学的アプローチ―」、『日本語学』第18巻10号 (10月号)、40-56。明治書院。

宇佐美まゆみ (2001a) 「21世紀の社会と日本語」『言語』1月号、大修館書店

宇佐美まゆみ (2001b) 「ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』国立国語研究所編、9-58。凡人社

宇佐美まゆみ (2001c) 「デイスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能―敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること―『語学研究所論集』第6号、1-29、東京外国語大学語学研究所。

宇佐美まゆみ (2001d) 「対人コミュニケーションの社会心理学―デイスコース・ポライトネスという観点から―」『月刊言語』第30巻第7号 (6月号)、78-85。大修館書店。

宇佐美まゆみ (2001e) 「ポライトネス理論から見たいく敬意表現―どこが根本的に異なるか」『月刊言語』第30巻第12号 (11月号)、72-79。大修館書店。

宇佐美まゆみ (2002) 連載「ポライトネス理論の展開 1-12」『月刊言語』31巻1-13号 (1-12月号)、大修館書店。

宇佐美まゆみ (2003) 「異文化接触とポライトネス」デイスコース・ポライトネス理論の観点から『国語学』54(3)、国語学会、2003:7、117-132。16頁

宇佐美まゆみ (2008a) 「ポライトネス理論研究のフロンティア―ポライトネス理論研究の課題とデイスコース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11(1):4-22。

宇佐美まゆみ (2008b) 「相互作用と学習―デイスコース・ポライトネス理論の観点から―」、西原鈴子・西郡仁朗(編)『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』pp.150-181、ひつじ書房。

宇佐美まゆみ (2009a) 『伝達意図の達成度』『ポライトネスの適切性』『言語行動の洗練度』から捉えるオーラル・プロファイゼンシー」、鎌田修・山内博之・堤良一(編)『プロファイゼンシーと日本語教育』pp.33-67、ひつじ書房。

宇佐美まゆみ (2009b) 「視点としての日本語教育学－日本語教育学の新しいパラダイム－」、『2009年度「台湾日本語教育研究」国際シンポジウム－日本語教育のジャンルのひろがり求めて』、pp. 4-22.

蒲谷宏、川口義一、坂本恵、清ルミ、内海美也子 (2006). 『敬語表現教育の方法』大修館書店.

<英語>

Brown, P. and Levinson, S. (1978). *Universals in language usage: politeness phenomena. In Esther N. Goody. ed. Questions and politeness.* Cambridge University Press, 56-311.

Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge University Press.

Brown, R. (1990). Politeness theory: Exemplar and exemplary. In I. Rock (Ed), *The Legacy of Solomon Asch: Essays in cognition and social psychology.* Hillsdale: Lawrence Erlbaum, Associates.

Brown, R. and Gilman, A. (1960). The pronoun of power and solidarity. In T.A. Sebeok (Ed.), *Style in Language.* Cambridge: M.I.T. Press and John Wiley & Sons, Inc. 253-276.

Fraser, B. (1978). *Acquiring social competence in a second language.* RELC Journal, 9 (2), 1-26.

Fraser, B. (1990). Perspective on politeness. *Journal of Pragmatics*, 1, 219-236.

Lakoff, R. (1973). The logic of politeness: or minding your p's and Q's. *Chicago Linguistic Society*, 9. 292-305.

Leech, G. (1983). *Principles of pragmatics.* New York: Longman. 『語用論』池上, 河上訳, 紀伊国屋.

Usami, M. (2002). *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness.* Hituzi Syobo. Tokyo.

Watts, R. J. (1989). *Relevance and relational work: Linguistic politeness as politic Behavior.* *Multilingua* 8(2-3), 131 - 166.